木村文助研究

通信　26号　二〇一二・一一・一

さいたま市清水寛氏より書籍届く

《近藤益雄生誕一〇〇年記念出版》

近藤氏は戦前・戦後長崎県で長く学校教育に携わった。その中で木村文助の実践に触れる

清水氏は近藤氏と交流を深めその実践の研究をしている。近藤氏は戦前自からや児童の童謡・詩を「赤い鳥」などに投稿し入選している。木村文助が著した「村の子供」に衝撃を受けたと記されている。

戦後は障害児教育に打ち込んでいる。「子どもに生きる」の内容は主として障害児教育が盛られている。

本は郷土資料館に収めている。

写真記録

子どもに生きる

詩人教師・近藤益雄の生涯

清水　寛／近藤原理　編

城台　巌　写真

二〇一二年

五・一〇　「木村文助研究」通信25号発行

六・三　さいたま市清水寛氏（埼玉大学名誉教授）より書籍や資料届く

七・一三　北斗市教育広報「きらめき」No.25に綴り方「父ちゃ」高二安保さき、自由画「いろり」尋6吉田孫七　載る

一〇・三　北斗市教育広報「きらめき」No.26に綴り方「母のかえり」高一小林れん、自由画「風景」尋5釜澤みつ　載る

一〇・一五　各種リーフレット集作

予定

一一・三～四　大野地区文化祭　北斗市郷土資料館も会場（赤い鳥・木村文助コーナー常設展）

リーフレットを30種作成したので区切りとしてまとめて冊子にした。その中には「木村文助の足跡」と「村の子供　綴方生活」も含まれている。

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

母のかえり

大野小高一　小林れん

この間、母が私に長靴、妹にマントを買って来てくれると言って、隣の人と二人で函館に行った。

夕方、橇が沢山続いて来たようだから、私が「母、あの橇さ(に)乗って来ねべが(来ないだろうか)」と言うと、松ちゃは「ほんになあ(本当にね)」と言っているうちに、橇は家の前を通って行ってしまったら、小さい妹は「あれ、この橇さ(に)乗って来たがど思たけ(乗って来たと思ったけれど)乗って来ねえ」と言ってるうちに、今度は人の足音が聞えてきた。松ちゃは「あれい、母来たんでねべが(来たのでないだろうか)」と言っていると、裏の戸からすき見をしている人がある(いる)ので、小さい妹は飛び上がって「あれい、母来た」と叫んだら、笑って家に入って来た。私は「母、何番で来た」と聞いたら、母は「六時の汽車で来た」と言ったので、私は「つる子家の姉、いっつから来たえ(ずいぶん前に来たよ)」と言うと、母は「姉、また函館から乗って来たもの」と言った。私は「したら母も函館から乗ればえがったのに(よかったのに)。長靴買ってきたが」と聞くと、母は「いや、靴買うだけの銭(お金)持って行がねもの(持っていかなかったもの)」と言ったので、私は「したらなして(そんならなぜ)靴買ってけるって(買ってくれると)騙したの」と言うと、母は怒ったように「二十円や三十円持って行ったって、どっちゃも足れだ(どっちにも足りない)。この暮れの買い物するんだもの、どこね(に)そたらね(そんなに)買わいんだ(買えるんだ)」と言ったので、私は黙っていると、母は風呂敷包みを開いてマントを出して、「こら松ちゃ、着てみろ」と言ってマントをのべた。

妹は笑いながら着ると、少し長かった。私は「どら(どれ)、おら着て見るして(私が着てみるから)よこせ」と言って、取って着てみると丁度よかったので、妹に「長靴買ってけだら(くれたら)、マントとばくべあ(交換しよう)」と言うと、妹は「いらねであ、誰、ばぐば(いらないよ、誰が交換するものか)」と言ったので、私は「おらさば何も買ってけねで(私には何も買ってくれないで)、松ちゃさばし買って来てけで(松ちゃにばかり買って来てくれて)」と言うと、母は「そら、そのかわり、脚絆買って来てけだべね(買って来てやっただろう)」と言って、脚絆を出した。私は「こたらもの(こんなもの)、二十銭か三十銭のもの、松ちゃさば(には)八円も九円もする高げもの(高い物)買ってけで(くれて)」と言うと、母は「やたらね(に)、小言つぐな(文句を言うな)。いつか大野さ(に)行ったら買ってけべね(買ってあげるだろう)」と言ったので、私は泣きたくなって、炬燵の中へ頭を入れてそのまま眠ってしまった。

朝に起きて、また母に言うと、母は「こやかましね(うるさいね)」と言って怒ったので、私は、買って来てくれればそれでもいいと思って、二、三日、黙っていたが、父が大野に行くというから、買って来てくれればいいなあと思ったが黙っていると、晩、父が靴を持って来て、「れん、これはいてみろ」と言ったので、私は立っていくと、父は「これでも言うこと聞かねば(聞かないと)、靴も何もとってしまうぞ」と言ったが、うれしい涙がこぼれた。

(大正十四年五月号)

風景　大野小尋五　釜澤みつ
(昭和2年8月号)

■ことばの意味

【母(かが)】子どもが母親を呼ぶときの方言。幼児言葉。

【脚絆】旅や作業をするとき、足を保護し、動きやすくするため、すねにまとう布。

綴方選評

鈴木三重吉

小林さんの「母のかえり」は、うちの中で、よくありそうな出来事の一つを活写した、写実的な作品です。小林さんが、靴を買ってもらえなかったのに対比して、妹さんばかりがいいマントを買ってもらったことをぶつぶつ不平がる気持ちがよく出ています。すべての対話が生き動いていて、皆のいちいちの動作や表情までがはっきり浮かんでいます。

自由画選評

山本　鼎

釜澤みつさんの「風景」――悪くないが、物体を美しく見せすぎている。濃淡(トーン)の美に不注意だからいけない。

(編集・社会教育課　八木橋直弘)

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方（作文）や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

父ちゃ

大野小高二　安保さき

「さき、さき」と母の呼ぶ声がするので、「何した」と返事すると、母が「八軒家（現在の稲里地区）の婆来たから、じっとこっちの方さ（へ）寄って、皆押し付かって寝べし（身を寄せ合って寝ましょう）」と言ったので、そうして二人で寝ました。

寝てまもなく、家の戸をがらりと開けて「今晩は」と言って入って来た。すると母が「また父ちゃ（父さん）酔っぱらって来たね」と言うた。すると父ちゃが「今糞ふってくる（大便してくる）」と言ってマントを脱いで、「はあ酔っぱらった酔っぱらった」と言って便所に行った。そして便所にいて歌をうたうやら、「うまいうまい」とはやすやら、そばに誰かいるようである。すると母が「父ちゃば呼ばれ（父さんを呼びなさい）。呼ばないば（と）朝までああしてるから」と言ったので、私が「父ちゃ、父ちゃ」と呼ぶと、「何こいだ（どうした）」と言って出て、よっちゃ、くっちゃと（よろよろと）壁板にぶつかったり、のめったり（倒れそうになったり）してやっと家に入って来た。そうして、「殿様のお帰りでござるのに寝るって話があるか」と言って奥に入って来た。また「殿様のお帰りでござる、でござるわ。ござる、ござる、ござるわ」と言って母の頭を突つく。私とお祖母さんと「母ちゃ（母さん）、殿様のお帰りだどさ」と言って腹も何も痛くなるほど笑った。

今度はどてら逆さに着て、足を袖に通して「殿様のお帰りでござるのに寝るって話があるか」と言って、また母の頭を突つく。母が「あー あ痛い、どてら逆さに着て、それ」と言うと、「逆さまもくそもあったもんでない」と言って戸の方にばたりと転んで行ったりして寝ない。「皆わらさど（子どもたち）起こしてしまう。早く寝たらいがべ（寝たらいいでしょう）」と言うと、八軒のばんば（婆）来てあたべ（婆さんが来ていただろう）、おら（俺）三浦にいたきゃ（三浦さんのところにいたら）、俺家さ来るてあった（家に来ると言っていた）。来たべ（来ただろう）」と言うても母が知らんふりをしていると、「人、馬鹿にしてる、返事もしないで」と言うた。母が「来なかったよ」と言うと、「そうか、ずるい婆だなあ」と、いるのも知らないで言う。

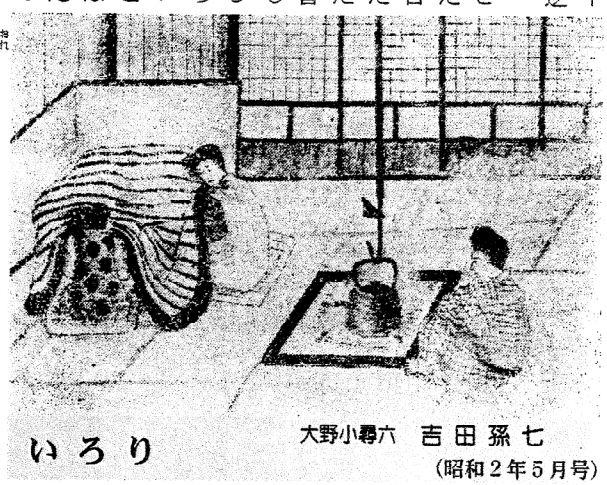
おしまいには、枕の方に足を横にして、足の方に頭をやって寝て歌をうたっている。その時、外を、ぶうっと自動車が通った。すると今度は、さかんに自動車の歌をうたっていた。私はぼんやり聞きながら、いつしか眠ってしまった。

（大正十三年五月号）

■ことばの意味

【マント】衣服の上から羽織って着る、そで袖なしのゆったりした上着。がいとう外套。

【どてら】保温・防寒用として綿を入れた広袖の着物。防寒・寝具用。主に男性が着る。



いろり　大野小尋六　吉田孫七

（昭和2年5月号）

綴方選評

鈴木三重吉

高二年（現在の中学二年）の安保さんの「父ちゃ」は、事象（現実の出来事）の把握が希薄であり、書き方がただただしいところが目につきます。ただ、上年級のわりに、表現にこましゃくれたところがなく、どこまでもうぶうぶしている素朴なところをとったのです。酔っぱらった人を、ともかく、写し生かしています。お婆さんが来ていられるのを知らないで「ずるい婆だなあ」と悪口を言うところでは、私までもひやりとしました。まあ、あれだけの悪口ですんだのでよかったわけでした。

自由画選評

山本鼎

吉田孫七君の「いろり」―その情趣（落ち着いたおもむき）は、この前（入選）の雪景色と同じに（で）なかなか面白い。ただ、こんどは図面が炉（いろり）のあたりで二分されているうらみ（不満）がありはしないか。図面のまとまりの上では、やや欠点となる。

（編集・社会教育課　八木橋直弘）

※漢字やかな遣いは現代風に改め、わかりにくい表現はかっこ書きで補足しました。また、当時の表現を再現するため、会話中の読みがなに方言の読みをあてたものがあります。

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館（旧大野町郷土資料室）
０４１－１２０１
北海道北斗市本町２丁目１２番７号
TEL（０１３８）７７－６６８１
閲　覧　９：００～１６：００
休　館　毎月第一月曜、年末・年始、臨時

「林芙美子作短編小説に引用」、
「ラジオ放送に引用」、
「北海道教育史に掲載」、
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵！

『１９２０年代（大正から昭和初期）の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう！

（「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数）

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く

大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称；文保研・ぶんぽけん）
会長；木下寿実夫
〇四一－一二〇一
北斗市本町３丁目11番32号
（０１３８）７７・８５３５